



静けさのなかに 聴こえてくる
ふりそそぐ光の音 ふりしきる雪の音——

グランド・シャルトルーズはフランスアルプス山脈に建つ伝説的な修道院。
これまで内部が明かされたことはなかった。
1984年に撮影を申請、16年後に扉が開かれる。
差し出された条件は音楽なし、ナレーションなし、照明なし
インタビューなし、中に入れるのは監督一人のみ。
そして5年後、完成した本作は大きな反響を巻き起こす。



大いなる沈黙へ

上映会

——グランド・シャルトルーズ修道院

このたび、映画「大いなる沈黙へ」上映会を、平成28年度岡山大学文学部プロジェクト研究「映像表現と人文学」と「21世紀の貧困学」の共催で、下記の通り開催いたします。

フランスのアルプス山脈に建つ修道院ラ・グランド・シャルトルーズ。1084年にケルンのブルーノが創建して以来、厳しい戒律により一般人が立ち入ることは許されてきませんでした。1984年に映画監督フィリップ・グレーニングが撮影依頼を出し、許可が下りたのはその16年後のこと。その条件は、音楽なし、ナレーションなし、照明なし。

映像を通して眼前に広がるのは、現代社会から身を引いて清貧生活を送る修道士の所作と、自然の光と音、そして900年以上にわたる歴史の重みです。両プロジェクトのコラボレーションとして、これほどふさわしい映像作品はないでしょう。多くの学生、教職員、市民の皆さんのご来場をお待ちしております。

日時 2017年1月20日(金) 16時30分～19時30分

場所 岡山大学津島キャンパス中央図書館3階セミナー室

上映作品 「大いなる沈黙へ グランド・シャルトルーズ修道院」
制作年：2005年 制作国：フランス/スイス/ドイツ
<http://www.ooinaru-chinmoku.jp>

問い合わせ先 岡山大学文学部准教授 大貫俊夫
TEL：086-251-7412 E-MAIL：ohnuki@okayama-u.ac.jp

参加費無料・申込不要
どなたでもご参加いただけます

塵の微片、耕された土くれ、年老いた盲目の僧の白い眉毛に、この上もない美しさを見出す。優雅とは静穏のことではないだろうか。

——ニューヨーク・タイムズ

世界初! ベールに包まれた伝説の修道院の全貌が明らかになった

「大いなる沈黙へ」は構想から21年の歳月を費やして製作され、長らく日本公開が待たれていた異色のドキュメンタリーである。フランスアルプス山脈に建つグランド・シャルトルーズ修道院は、カトリック教会の中でも厳しい戒律で知られるカルトジオ会の男子修道院である。修道士たちは、毎日を祈りに捧げ、一生を清貧のうちに生きる。自給自足、藁のベッドとストーブのある小さな房で毎日を過ごし、小さなブリキの箱が唯一の持ちものだ。会話は日曜の昼食後、散歩の時間にだけ許され、俗世間から完全に隔絶された孤独のなか、何世紀にもわたって変わらない決められた生活を送る——これまで内部が明かされたことはなかった。

ドイツ人監督、フィリップ・グレーニングは1984年に撮影を申し込み、ひたすら返答を待つ。そして16年後のある日、突然、扉が開かれた。彼は修道会との約束に従い、礼拝の聖歌のほかに音楽をつけず、ナレーションもつけず、照明も使わず、ただ一人カメラを携えて6か月間を修道士とともに暮らした。なにも加えることなく、あるがままを映すことにより、自然光だけで撮影された美しい映像がより深く心にしみ入り、未知なる時間、清澄な空気が心も身体も包みこむ。

音がないからこそ、聴こえてくるものがある
言葉がないからこそ、見えてくるものがある

中世からの石造りの聖堂、回廊——冬から春へ、ゆるやかにめぐる季節、くりかえされる祈りと務め、修道士たちの澄んだまなざし、空のうつろう青色、雲、ふりしきる雪、火、窓辺の明かり——この世の喧騒からとおく離れ、まったく異なる時間が流れてゆく。この作品は修道院をただ撮影したというよりむしろ、映像が修道院そのものとなったと言える。今日の社会のように、かたちや結果に価値をおくのではなく、内なる精神に意味を求める日々、この沈黙にみちた、深い瞑想のような映画には、進歩、発展、テクノロジーのもとで、道を見失った現代社会に対する痛烈な批判と、今日の物質文明を原点から見直そうとする思いが根底にある。森羅万象、瞬間がこの上なく尊く、観る者はこの2時間49分をとおして、かけがえのない経験をする事だろう。

本作は公開されるやヨーロッパをはじめ各国で大きな反響を呼び、2006年サンダンス国際映画祭で審査員特別賞を受賞した他、多数の映画賞を受賞した。日本では9年の歳月を経て、待望の公開となる。

サンダンス映画祭2006 審査員特別賞受賞
ヨーロッパ映画祭2006 ベストドキュメンタリー賞受賞
ドイツ映画批評家協会賞2006 ベストドキュメンタリー賞受賞
ドイツカメラ賞2006 最優秀賞受賞
バーバリアン映画賞2006 ベストドキュメンタリー賞受賞

大いなる沈黙へ ——グランド・シャルトルーズ修道院

監督・脚本・撮影・編集：フィリップ・グレーニング

製作：A Philip Groning Film Production

2005年/フランス・スイス・ドイツ/カラー/169分/ビスタ/ドルビーデジタル

原題：Die Grosse Stille/字幕：齋藤敦子

配給・宣伝：ミモザフィルムズ 宣伝協力：テレザ/サニー映画宣伝事務所

後援：ユニフランス・フィルムズ/Goethe-Institut Tokyo東京ドイツ文化センター

推薦：カトリック中央協議会広報 字幕監修：佐藤研/日本聖書協会

www.ooinaru-chinmoku.jp

静寂の中に生きる修道士たちの一途さに僕は畏れを感じ、同時に憧れを抱いてしまうのは、彼らが自分の存在を強く信じていることができるからだろう。それは僕が山の深奥でみた幻想に似ている。

坂本大三郎 / 山伏、イラストレーター

修道士たちは、今この瞬間も沈黙のなかで祈っているかもしれない。

こうした場所が地球の片隅にあるということを知るだけで、ほくたちの日常もまた少しだけ豊かになるはずだ。

石川直樹 / 写真家

169分、音楽、ナレーションなしという事前情報に尻込みしそうになりましたが、拝見してみるとあれだけの長さに意味があることが分かりました。

19世紀の作曲家シューマンが、シューベルトの60分以上かかる第8交響曲について「天国的長大さ」として高く評価したように、まさに「天国的長大さのドキュメンタリー映画」でした。修道院の沈黙の深さを伝えるには169分の時間が必要だったのです。アメリカ的な編集を施せば30分もかからずに描き切ってしまう内容を、悠久の時間に委ねて描くことにより、初めて意味ある映像となったのだと思います。

列王記の一説が繰り返し紹介されていましたが、「地震の後 火が起ったが主はおられなかった 火の後 静かなやさしい さざめきがあった」という言葉に、シャルトルーズ修道院の生活が見事に表されているのだと思いました。

「静かなやさしいさざめき」に耳を傾ける生活が私たちにいかに多くを語りかけるのか、見終わってしばらく呆然とさせられました。

天城鞆彦 / Tokyo Docs 実行委員会委員長

もう言葉は 声にもならない

素の姿で 透明なまま 世界と触れ合う

映画は その光に 寄り添った

津田直 / 写真家

沈黙が映像となり、そして静寂が語られる。これはあり得ない映画の試み。

沈黙が生活となり、そして静寂を生きる。それは例え様もない人生の試み。

そのどちらもある私たちにとって、想像すらしない選択に違いない。

やましたひでこ / 「断捨離」提唱者

聖務と労働に黙々と打ち込む修道士たちの姿が清々しく美しい。儀式や聖句の意味が分からなくても、雄弁な映像美が観客の感性を導いてくれるはずだ。

修道院の四季を通してゆったりと流れる静謐な時間は、そのまま得難い映画体験になるだろう。

青池保子/漫画家

時間が止まり、中世の修道院が冷凍保存されて、まさに現代に再現されている。

古典主義時代の絵画を連想させる、光と影のコントラストが効いた映像が、信仰の厳粛さを表現しているようだ。内面へと向かう孤独と共同の生との関係について考えさせる映画だ。

時おり現れる、修道院の閉じられた世界と俗世とのつながりを思わせる断片的な場面で、修道士たちが少しかわいい。

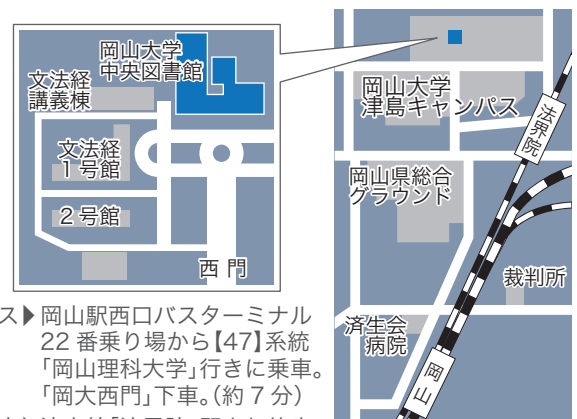
大澤真幸/社会学者

静寂。質朴。禁欲。人里離れた山中で、数百年変わらぬ祈りの生活を、規律のままに生きる修道士たちがいる。一瞬とも永遠とも思える時間のなかで、神の臨在をあなたは実感するだろうか。

橋爪大三郎/社会学博士

「衣食住」とこれほどまでにダイレクトに関わる修道士たちの姿は、「生きること」の本質を静かに我々に問いかけてくる。神との対話を中心に据えた生活の反復のなかにこそ、微差を感じるセンサーが磨かれ、ときに圧倒的美しさを発見する。映像と音楽による時間芸術である映画のひとつの到達点。

光嶋裕介 / 建築家



バス▶岡山駅西口バスターミナル 22番乗り場から【47】系統 「岡山理科大学」行きに乗車。「岡大西門」下車。(約7分)

徒歩▶津山線「法界院」駅より徒歩 約10分。

岡山大学津島 キャンパス中央図書館 3階セミナー室
〒700-8530 岡山市北区津島中 3-1-1